

大学

アーカイブズ

関東地区大学史連絡協議会会報

1993. 3. 31 No. 8

Association of College and University
Archives of Kanto Region

1992年10月1日（木）合同研究部会（講演会）

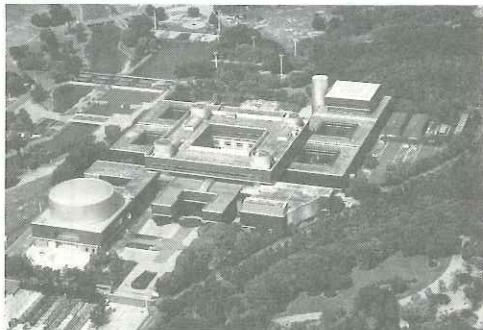
資料整理とその管理

—国立民族学博物館での現状と課題—

国立民族学博物館情報管理施設 宇野文男

民族学資料とは

国立民族学博物館（以下、民博という）は、世界の諸民族の文化的特色を明らかにし、それらを比較研究するために民族資料を広く収集、整理、保管して、全国の研究者の利用に供する民族学の研究センター、あるいは情報センターとして1974（昭和49）年に創設された。3年後の1977（昭和52）年に展示が一般公開され、爾来15年が経過した。その間にも、民族学の研究のためにさまざまな民族学資料を収集してきた。



国立民族学博物館全景

民族学の研究を目的として使用される資料は多種多様で、民博では大きく三つのカテゴリーに分けている。その一つは、「標本資料」とよぶモノであり、小さいものは釣り針から大きいものでは船まで、さまざまな生活にか

かわる用具や道具類である。1992（平成4）年10月現在195,000点を収蔵している。二つめはレコード、テープ、CD、フィルムなどの「映像・音響資料」で、約51,000点。三つめは単行本、雑誌、文献・文書類などの「文献図書資料」で、図書370,000冊、雑誌10,000種をそれぞれ収蔵している。

従来の民族学研究においては、伝統的に文献資料と標本資料がもっとも中心的な役割をになってきた。民博でも図書の充実と標本資料の整備を重要視しているが、多様な映像資料、音響資料等を利用することによって、新たな民族学の研究法、研究分野をきりひらこうと努めている。

標本資料の収集

標本資料の収集は1974（昭和49）年の創設した年から開始された。翌年には東京大学理学部人類学教室に永く保管されてきた民族学資料約6,200点、また澁澤敬三の創設したアチック・ミューザムをひきついだ旧文部省史料館資料約21,000点などのコレクションが受け入れられた。1977（昭和52）年11月の展示の一般公開時に約48,000点を収蔵。その後展示場の拡充や増設にあわせ、それらの地域を中心に収集が行われ、195,000点を収蔵するに至っている。そういうたった資料はどのようにして収集されるのであろうか。

収集の基本的な考え方は、教官が現地で直接資料を集めることである。年間5~8名の教官が海外にでかけている。その際ただ単に資料を収集するだけでなく、そのモノに関するバックグラウンドを含めた詳細な情報をセットで集めることに重点がおかかれている。

そのため「収集カード」とよぶA5サイズのカードに、その資料の名称、現地名、収集場所、用途、使用法などさまざまなデータを記入する。これらの情報は、のちにふれるがコンピュータに入力される。資料を直接収集する以外には、購入することや寄贈を受けることがある。その場合でも受け入れるポイントは、その資料に情報がともなっているかどうかである。

民博が世界の民族資料を収集することを目的とすることを考えれば、195,000点という数字はきわめて少ないといわざるをえない。またヨーロッパやアメリカの博物館の収蔵数と比べると勝負にならない。民博が世界の第一級の博物館をめざすには、もはや量ではなく、日本の技術<エレクトロニクス、メカトロニクス>の採用によって、いかに効率的に情報検索するのか。このことについてつぎに述べることにする。

資料の整理

集めたモノや情報はどのように整理すればよいのか。大量のデータを集め、正しく役立つ情報をできるだけ早く研究者に伝えるにはコンピュータをつかうほかない。民博では創

設以来コンピュータリゼーションを目標にしてきた。そのため創設段階で次のようなことについて十分な検討をしてきた。

まず収集された資料を整理し、保管に至るまでの一連のシステムから検討はじめた。ついで将来のコンピュータ導入を前提とした、さまざまなカード類の内容やその様式を検討し、それらを収納するファイルシステムなどが決められた。また資料に関する基本的な情報を記入する「収集カード」を定め、それをもちいて標本資料を整理することとした。

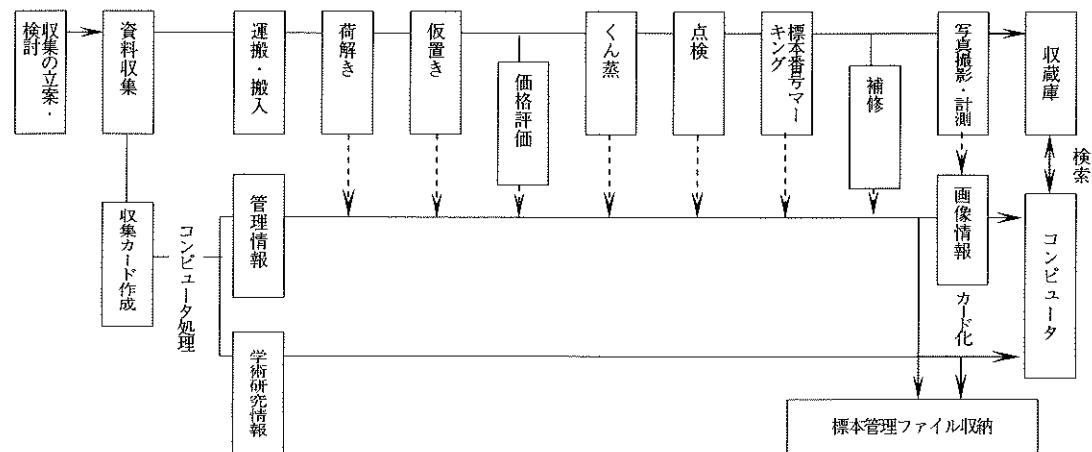
搬入された標本資料は、まず資料1点ごとに資料の管理や検索などの基本となる番号をつける。従来、博物館などでは、番号をつける場合、地域別やモノ別、年度別などに分類して番号が付与されていたが、民博では単純に受け入れ順に通し番号をつけ、それを「標本番号」とよんでいる。下図は資料整理の基本的な流れであるが、実際にはくん蒸したあと、直接収蔵庫に収蔵することが多い。

民博の収蔵庫（約5,200平方メートル）の大部分は一般収蔵庫で、衣類や漆器類などの特別に温度・湿度の管理を必要としている標本資料のみ、特別収蔵庫に収蔵している。資



標本資料を保管する収蔵庫

<標本資料の収集から搬入まで>



料を保管するにあたって、収蔵効率や見やすさなどの点にも配慮しながら、それぞれの資料にあわせた収蔵棚や収納庫などの収蔵設備、収納器具等のさまざまな工夫をしている。資料の収蔵のしかたは、基本的には標本番号順(受け入れ順)で、モノ1点ずつの所在地をきめている。

モノの収蔵場所が決まると、所在地をコンピュータに入力しておく。資料ごとに標本番号をつけ、収蔵場所を決める。大量に資料を扱う場合には、こうしておけば、業務に余力ができた時点で、容易にその資料を取り出し、資料の点検作業やマーキング、写真撮影などを行えばよいのである。資料点検は、材質や損傷状況の状態をあらかじめ一定のコードを定めておき、そのコードを用いてチェックするものである。このデータはコンピュータに入力され、収蔵後の資料の保存管理に役立つわけである。

コンピュータの活用

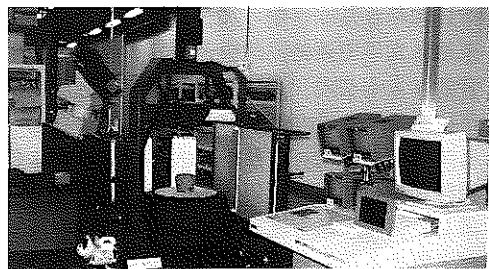
1980(昭和55)年4月になって標本資料の整理や管理、あるいは情報の蓄積などを行うシステム「標本管理システム」の開発に着手し、翌年の1981年にその一部が稼働。このシステムは、1982年には全面稼働し、端末装置の画面と日本語で対話しながら、簡単に情報の入力、修正、追加ができ、同じ情報は複写機能によって入力の簡素化を図っていることが特徴である。今でこそ、パソコンやワープロがかなり普及して、あたりまえといえばそれまでであるが、当時としては、博物館資料の整理や管理にコンピュータを駆使することは、ほとんど例のないことであった。

先にふれた収集カードのデータに追加や修正をほどこし、これによりつくりだされた情報は、大きく管理情報と学術研究情報にわかる。前者は、標本名、収集場所、収蔵場所、価格等、資料の管理に必要とする基本的な情報であり、後者は用途、使用法などの情報のほか、最新の研究成果をえたものである。これらは検索用データ・ベースとよばれ、研究者が検索に利用するデータ・ベースである。

さらに標本資料の在庫管理や展示、貸出し等の履歴情報、保存についての情報などの収

藏した資料の管理のための管理用データ・ベースもシステムに組み込まれている。

1983(昭和58)年には、民博ではモノの形、寸法、重量、色彩などの画像情報を入力・蓄積する「標本画像自動処理装置」を開発した。この装置により、資料の整理業務がはかかるとともに、蓄積された画像情報を各種の研究に利用できるようになった。



標本画像自動処理装置の2号機

その後、標本管理システムで作成された文字情報から画像を検索し、表示するシステム「標本資料ライブラリーシステム」も稼働はじめ、民族学の研究に広く利用されることになった。

魅力ある博物館をめざすには

すでに述べたように、常設展示場は1977年に4つの展示場で開館したが、その後1979年、1983年に二つの展示場が増設された。さらに、1989(平成元)年には特別展示館が完成し、静的な常設展示とちがって、特別・企画展示では、特定のテーマや「自由で多様」な展示表現ができるようになった。これらの展示準備の資料選定や展示の演出にも、コンピュータは大きな威力を発揮している。

今後建設されるであろう第6・7展示場に計画されている、モノに関するあらゆる種類の情報を検索できる「学習コーナー」の準備を現在進めている。また研究機関として、あるいは入館者サービスを含めた「魅力ある博物館」としての長期計画も策定中である。

これまで蓄積してきた膨大な文字データ、画像データをより有効に活用し、研究だけではなく、展示を含む一般むけ情報サービスを含めた総合的な情報検索・提供システムの開発を行うことが、国立民族学博物館にとって重要な課題となっている。

1992年度合同研究部会を終えて

中央大学大学史編纂課

藤田正・松崎彰

はじめに

1992年9月30日から10月2日の3日間、関東地区大学史連絡協議会と西日本大学史担当者会による初の合同研究部会が、大阪府吹田市にあるオオサカサンパレスをメイン会場として開催された。これまで大学史編纂および資料保存・利用等に関する共通の諸問題を協議し、情報交換を進めてきた東西二つの組織が主催する試みとあって、参加大学は38校、参加者は57名にのぼった。

同志社大学・大谷大学の見学

初日の9月30日は、関東地区大学史連絡協議会のメンバーが同志社社史資料室に集合し、河野仁昭氏（同資料室長）の案内で学内建造物を見学した。同志社大学内には、クラーク記念館・有終館・彰栄館といった国的重要文化財があり、それらの建設や由緒・逸話等について河野氏より詳細な説明をうけた。つい



で大谷大学へ移動し、同大学図書館に収蔵されている大蔵経ほかの仏典関係資料および諸資料の保存状態を見学した。当日は休館日であったが、図書館長の加来一丸氏をはじめとして、平野紹寿氏（図書館課課長）・横田惠

氏（同課主任）・林一宗氏（真宗総合研究所）ほかの皆様のご好意で館内を案内していただき、収蔵資料の解説をしていただいた。

講演会

翌日（10月1日）は、オオサカサンパレスの会議場に両会のメンバーが集合し、中央大学の浜松晃氏（広報部部長）の挨拶をもって研究会を開会した。まず午前中には、国立民族学博物館の宇野文男氏（情報管理施設情報



講演する宇野文男氏

企画課専門員）に「資料の整理と管理—国立民族学博物館での現状と課題—」と題する講演をお願いした。宇野氏は、「博物館法」と同法にもとづく国立民族学博物館の運営について概観し、配布資料をもちいて具体的な作業内容や問題点等を指摘された。講演の詳細については、本号に掲載した宇野氏の論稿を参照していただきたい。また本来ならば、国立民族学博物館の見学と宇野氏の講演とを同じ日にしたかったのであるが、今回は都合上、見学を翌日に開催せざるをえなかつたのが若干残念であった。

パネルディスカッション

ついで、午後にパネルディスカッションが開かれ、立教大学の中野実氏（図書館大学史資料室嘱託）と同志社の河野氏が「大学史編纂と資料の収集・保存」をテーマとして報告した。中野氏は、従来の大学史研究の問題点を法制史的分析に偏っている点に求め近年の



報告する河野仁昭氏（中央）と
中野実氏（左）、司会の松崎彰氏（右）

個別大学史編纂が、分析視角や資料保存の点で従来の研究の質を高めていることを強調された。また同氏は、これらの動向を大学史研究の可能性や多様性を示しているとした上で、現在の個別大学史編纂が「日本近代史上への位置づけ」という一般的な課題に自校史を解消しすぎるのではないかとの疑問も提起された。

河野氏は『同志社百年史』編纂の経験をふまえて、大学史編纂の問題点を具体的に展開された。まず、一般的に年史編纂は臨時的な事業と認識されてきたため、資料収集が編纂に必要な範囲に限定されたり、編纂終了後の恒常的な組織化が阻害されてきた点を指摘し、年史編纂の意味を改めてとらえ直すことの重要性を主張された。また、同志社を事例として、編纂終了前後における具体的な業務内容を紹介し、大学史関係資料を保存・管理し、総合的な情報を学内外に提供できる組織の必要性を強調された。

両報告終了後、中央大学の松崎彰・藤田正（大学史編纂課嘱託）を司会・書記として参加者とのディスカッションを行なった。まず、中野報告について、研究者と職員を区別する必要性の有無が質問され、両者の有機的連関にもとづいた編纂事業の事例は少ないと応答があった。つぎに河野報告については資料収集の合理的方法の有無が質問され、学内各部署を精力的にまわって資料を収集された河野氏の経験が披露された。

全体的に見て、ディスカッションでは、編纂体制・資料収集・資料利用等の問題をめぐる質疑応答がかわされたといえる。編纂体制

については、委員会制にもとづく集団執筆をとる際の問題点や、最近の出来事をとりあげる場合の「歴史的評価」は必要か、といった問題が討議された。また、資料収集をめぐっては、具体的な購入予算や収集方法及び整理の実態などについて、各大学から事例報告を兼ねた質疑応答がかわされた。さらに、資料利用については「展示会」開催の事例が報告され、大学に資料室等を設置する目的が年史編纂のみではない点が強調された。各大学とも、少ない人員・予算に苦しみながらも創意工夫を重ねていることが実感されたディスカッションであったが、時間切れとなり、関西学院大学の長尾文雄氏（学院史資料室長）の挨拶で閉会となった。

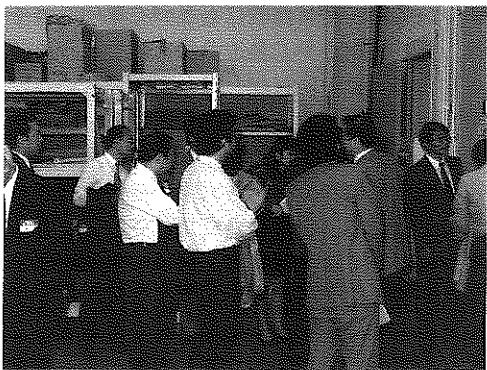


熱心に報告を聞く参加者

ディスカッション後の懇親会は、河野氏の挨拶と東海大学の武市知弘氏（資料室長）の乾杯の音頭で開会された。実のある討議の直後であったため、自己紹介や歓談も終始和やかなムードで進行し、毎年の開催を望む声があがるなど、各大学とも親交を深めることができた。進行役は神奈川大学の澤木武美氏（大学資料編纂室）、閉会の辞は中央大学の村松良人氏（大学史編纂課長）であった。

国立民族学博物館の見学

10月2日は、国立民族学博物館を見学した。三班に別れて、宇野氏のほか宇治谷恵・飯島善明の両係長から同館の書庫・収蔵庫・標本資料室・くん蒸室・電子計算機室などを丁寧に案内していただいたが、前日の宇野氏の講演を聞いていたため、実際の作業内容が非常に説得力のあるものに思えた。そして、この



国立民族学博物館の収蔵庫を見学

見学をもって、3日間にわたる合同研究部会は終了した。

むすび

大学史を編纂し、大学史関係資料を収集・整理・保存していくという仕事の重要性は次第に認識されつつあるが、具体的な内容については暗中模索の部分が多い。しかし、今回全国レベルでの研究会が開催できたことは、暗中模索を克服しようとする動向が各個別大学の枠を越えた広がりを見せて展開している事実を示している点で、大変意義深いことといえる。

最後に合同研究部会開催に尽力くださった各位に御礼申し上げるとともに、参加者一覧を掲げてむすびとしたい。

*関東地区大学史連絡協議会

神奈川大学 大学資料編纂室	澤木 武美 入谷 秀夫
慶應義塾 福澤研究センター	中森 東洋
國學院大学 校史資料室	益井 邦夫
成蹊大学 学園史料室	原田 清美
専修大学 年史資料室年史資料課	内山 宏・西 慶一
玉川大学 図書館学園史料室	潟山 皓一 岩瀬 文人
中央大学 広報部大学史編纂課	浜松 晃・村松 良人 松崎 彰・藤田 正
津田塾大学 学長事務室	丸山 昌子
東海大学 資料室	竹市 知弘 小林栄美子・日露野好章
東京基督教大学 歴史資料保存委員会	大嶋 義隆

'東洋大学 井上円了記念学術センター	宮原 洋
日本工業大学 総務部資料室	松本 義男
日本女子大学 成瀬記念館	秋山 俱子
日本大学 大学史編纂室	吉田 信一
	近沢 昭一
法政大学 多摩図書館資料課	本木 廣
	北島 至
武藏学園 企画室	川村 政義
武藏野美術大学 大学史史料室	渡辺 博志
明治大学 歴史編纂事務室	鈴木 秀幸
立教大学 図書館大学史資料室	中野 実
早稲田大学 大学史編集所	関田かおる
小林 愛子（上智大学聖三木文庫）	
*西日本大学史担当者会	
大谷大学 真宗総合研究所（総務課）	
	林 一宗
追手門学院大学 記念資料室	杉浦 義雄
	庶務課
関西大学 事業局出版部出版課	胸永 等
	井内 雄二
関西学院 学院史資料室	熊 博毅
	長尾 文雄
神戸女学院大学 史料室	川崎 啓一・宮本 義澄
	若山 晴子
	寺西裕加恵
西南学院大学 広報・調査課	芳永 弘
聖和大学 総務部歴史資料室	井口 純子
帝國学園 本部事務局総務課	藤江 宗一
天理大学 広報部広報課	野口 直美
同志社 社史資料室	河野 仁昭
南山大学 総務部広報室	加藤 雅毅
梅花学園 総務部資料室	遠藤 トモ
福岡大学 企画部広報課大学史資料室	藤本 俊史
	三輪 晴雄
佛教大学 図書運用課	桃山学院 学院年史委員会
	原 登久雄
	中村 宗子
	学院年史委員
立命館 百年史編纂室	西口 忠
	西川 賢
	小西 康夫
龍谷大学 350周年記念事業事務局	花月 大誠・糸川 幸雄
	(五十音順・敬称略)

1993年1月27日(水) 研究部会(講演会)

戦後教育改革に関する資料と研究

日本大学・文理学部 佐藤秀夫

一

佐藤と申します。私の本来の専攻分野は、日本近現代の初等教育を中心とした普通教育史であります。「高等教育」史につきましては、研究的な興味はもっていますが、それ自体を専門的にあつかったことはありません。ただ、普通教育に関連する限りにおいてと、1991年までの職場において日本近現代教育に関する史料の調査収集に当たっていた関係で史料面において、高等教育を「垣間みた」程度に過ぎないことを、はじめにお断り致しております。

今回は、戦後教育改革史料調査にたずさわった経験から、主に史料関係についてご紹介を致すということで、責を果たさせていただきたと存じます。

二

最初に、戦後教育改革(高等教育改革)に関する国内史料の概要についてご紹介いたします。大学史編纂の立場からすると、国内史料に多くご関心をお持ちだと存じます。ところが、こと戦後教育改革史料に関する限り、占領軍関係の在米史料と日本側の国内史料とでは、前者が質・量ともに断然豊富で、後者は著しく見劣りするという状態にあります。これは、権力の民衆に対する責任意識の質の差異によるものと、私は考えています。

国立教育研究所での史料調査によってみると、(1)文部省関係史料と、(2)各大学所蔵文書に分けて考えることができます。

(1) 文部省関係史料

これは、「政策形成関係史料」と「大学設立認可関係史料」とに大別できます。「政策関係」で最も貴重なものは、1946年から1952年までの被占領期を通じて設置され、戦後教育改革諸政策の立案に中心的な役割を果たした「教育刷新委員会(審議会)」の議事速記



講演する佐藤秀夫氏

録と関係文書とです。この委員会(審議会)の高等教育関係のいくつかの特別委員会と、その建議案を検討した総会との各議事録は、日本側の高等教育改革構想を確認する上で不可欠な史料です。その原本は、今日文部省大臣官房総務課に記録として保存されていますが(既に全量の5%程度が欠けていますので、完全ではありません)、残念ながらまだ非公開になっています。講談社の野間教育研究所にその総会分の写本がありますが、原本との照合が必ずしも確実とはいえないものようです。ただし、近い将来これらの議事録すべてを活字化することにより公開しようという計画が、文部省の了解を得て進行中です。

国立教育研究所教育図書館に保存されている「戦後教育資料」は、1960年に文部省関係の当事者たちに広く呼びかけて、各人の手元にある改革時の資料約4,000点を収集したものです。今日では極めて貴重な資料群をなしています。教育刷新委員会(審議会)の配布資料なども、文部省の上記文書の他に、この資料中にも多く保存されています。同様に同図書館に保存されている「辻田力文書」「本田弘人文書」「花井重次文書」なども、高等教育関係として注目されるものです。また、日本私学教育研究所所蔵の「春山順之輔文書」、広島大学大学教育研究センター所蔵の「森戸

辰男文書」なども無視できないものです。戦後資料に関して、文部省自体は保存に留意しておりませんので、関係者の私家文書に多く期待しなければならない状況におかれています。

関東大震災（1923年）以降の文部省による公私立大学・専門学校等の設立認可関係文書は、かつては文部省に保存されていましたが、現在は国立公文書館に移管保存されています。これが大学史にとって貴重な資料であることは、いうをまちません。

（2）各大学所蔵文書

これについては、皆様の方がお詳しいでしょうから、説明は省かせていただきます。

ただ一言、日本ではまだ本格的な大学アーカイブスの設置が進んでいないために、大学毎の所蔵文書の情報交流やその史料閲覧の便がさほど図られていないという問題点のあることを指摘しておきたいと存じます。

三

上述の国内史料とは対照的な状況にあるといえるのが、連合国軍側の占領文書中の諸史料です。

その中軸をなすのは、東京におかれた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ／SCAP）文書ですが、これが国立国会図書館の努力によって、極東委員会（FEC）対日理事会（ACJ）や米国政府のSWNNC（国務陸軍海軍三省調整委員会）・國務省・陸軍省・統合参謀本部など、連合国および米国の対日占領関係諸機関史料類とともに、ほとんど全てマイクロフィルム化され、今や同図書館憲政資料室において保存・公開されています。高等教育改革関係では、GHQ／SCAP、CIE（民間情報教育局—高等教育一般）はもとより、E S S（経済科学局—自然科学関係の高等教育）、PHW（公衆衛生福祉局—医学関係の高等教育）などに目配りする必要があります。

この他、米国対日教育使節団（USEMJ）メンバーやCIE担当者などの私家文書については、かなりの数が国立教育研究所教育図書館に保存されています。例えば、有名なイールズ（Eells, W.C.）文書なども含まれています。詳細は、国立教育研究所で刊行された『海外学術研究報告書 占領期日本教育に

関する在米史料の調査研究』（戦後教育改革資料6）をご参照ください。

四

おわりに、普通教育史を専攻している立場から、高等教育史とくに大学史編纂についての感想を述べさせていただきたいと思います。

普通教育学校は一般に規模が小さいので、沿革史編纂は同窓生およびその学校教員が編集に当たるのが普通でして、教育史専門家に委嘱する場合など、ほとんど無いといってよいでしょう。それにひきかえ、規模の大きな大学沿革史では、大学人である教育史専門家の参加する例が少なくありません。普通教育史でいえば、府県または大都市の教育史編纂に近いと存じます。

一般的普通学校史に無批判な「歴史肯定」の叙述トーンが多いのは、その価値評価は別として、上の編纂条件からしてやむを得ない面があるでしょう。府県・大都市の教育史でも編纂者の姿勢によって、同様な「歴史肯定」ものが少くないのですが、中には客観的な「歴史批判」性を持しているものもあります。とくに資料編では、多くの場合「都合のよいものだけ」を選ぶということは否定される傾向にあります。

ところが、大学史では普通学校以上に「歴史肯定」ものが多いように私には思えるのです。歴史研究や教育史研究では、優れて批判性を持っている筈の研究者が執筆の中心におられるにもかかわらず、その大学の果たした歴史上の問題性や問題構造をきびしく指摘せず、できる限り肯定的に「粉飾」しようとするものが多いようです。私は、その根底に、学問研究の府として大学は「本質的に」「善なるもの」ととらえる意識が働いているように思えるのです。ときどき大学の内面改革に関連して、「大学にする」「大学になる」と表現されるその「大学」観です。そういう文脈において、「小学校になる」「中学校にする」といった表現は、まず存在しないでしょう。

そこには、「学問の府」と「教育機関」とを断然格差あるものとして捉える意識が潜んでいるように思えるのです（最近の大学大衆化傾向をさして「大学も学校になった」と嘆

く向きもかなりおられます。私は発生の昔から大学は「学校」に他ならなかつたと確信するのですが)。「学問と教育との分離」を歴史的に批判する進歩派が、です。日本の普通教育戦前・戦時史を調べている立場からすれば、普通教育史をバラ色に描くには、逆にある種

の「勇気」がいるでしょう。それに比して、大学史や高等教育史を「加害」の観点から叙述したものよりも「受難」史として描くものの、何と多いことか。

やはりこの国の現状ではまだ、「学問」と「教育」とは厳然と区別されているようですね。

1992年11月13日（金）研究部会

マイクロフィルム版 福澤関係文書について

1992年11月13日、第22回の研究部会が、東京三田の慶應義塾図書館（旧館）の2階会議室で開催された。当日の参加者は、18大学34名であった。

最初に、慶應義塾福澤研究センターの西川俊作所長から挨拶があり、福澤研究センターの設立経緯やその組織的特徴及び主な業務などの説明がなされた。

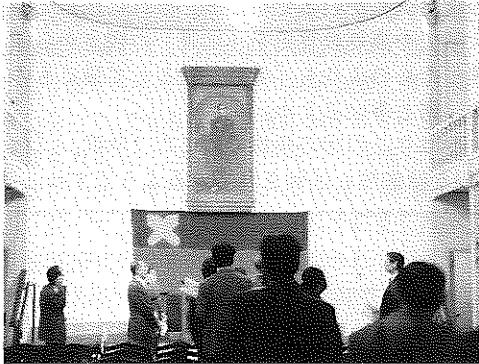
続いて福澤研究センター所員の佐志傳氏の報告「マイクロフィルム版 福澤関係文書と大学史の編纂作業について」が行われた。佐志氏は、1883（明治16）年刊行の「25年史」に始まった慶應義塾の年史編纂事業、50年史（明治40年刊）、75年史（昭和7年刊）、100年史（昭和33年～同43年刊）、そして1983年刊行の図録『慶應義塾 125年』のそれぞれの特色を概述され、続いて、1951（昭和26）年に設置された「塾史編纂所」から今日の「福澤研究センター」の設置に至る経緯を述べられた。慶應義塾では年史編纂を単なる学校の歴史に留まらず、近代日本研究の一翼を担うものと位置づけ、様々な分野から研究を積み重ねてきている。こうした流れのなかで1989年からマイクロフィルム版「福澤関係文書—福澤諭吉と慶應義塾—」が株式会社雄松堂書店から刊行され始めている。佐志氏は、このマイクロフィルム版刊行の経緯とその収録資料について詳細な説明をされ、これらの資料が慶應義塾の歴史を明らかにするとともに、福澤研究の深化をはかり、近代日本研究の多くの分野に貢献することになるであろうと述べられた。マイクロフィルム版「福澤関係文書」は、「福澤



報告する佐志傳氏

諭吉関係資料」と「慶應義塾関係資料」の二つの柱から成っている。「福澤諭吉関係資料」は、「福澤諭吉全集」（全21巻・別巻）刊行後に発見された新資料、福澤の著作の原稿本となつた蔵書、すべての著作の初版本とそれらの草稿、書翰などが収録されており、
1. 遺墨
2. 遺品
3. 蔵書
4. 書翰
5. 草稿
6. 覚書
7. 著作
8. 記録類
9. 関連資料
10. 評伝 の分類から構成されている。

「慶應義塾関係資料」は、
1. 基本資料
2. 入社帳
3. 社中之約束
4. 學業勤惰表
5. 名簿類
6. 評議員会記録
7. 学事及会計報告・慶應義塾學報
8. 学則・規則・便覽
9. 幼稚舎資料
10. 学校行事
11. 募金関係
12. 三田演説会
13. 学生生活
14. 出版活動
15. 関連学校資料
16. 修身要領
17. その他（各年度の卒業証書・写真、学校評判記、学生日記など）の分類のもとに1858（安政5）年の蘭学塾の開塾から創立50周年に至る諸資料（一部大正期に及ぶ）を収録している。佐志氏は、これらの「慶應義塾関係資料」の内容について詳しく紹介さ



三田演説館の内部

れたが、このような個別の大学史に関する諸資料がマイクロフィルム版として刊行される

のは、はじめてのことであり、慶應義塾が、日本の近代化の過程で果たした役割の大きさを考えると、多くの研究者、そして大学史編纂等に携わるものにとってもきわめて資料価値の高い、貴重な資料群といえる。大学史編纂に関わる私たちにとって、本研究部会での佐志氏の報告から学ぶことが多かった。

報告終了後、福澤研究センターの中森東洋氏の案内で、三田演説館と図書館（旧館）内の展示室の諸資料を参加者全員で見学、中森氏から興味深い説明を受けた。

（本研究部会の報告は、当日配付された資料、協議会の研究部会記録などをもとに、本会報編集担当者がまとめたものです。）

常任委員会議事録（抄）

- 第30回 1992年9月30日（水）12時～13時
会場 同志社 社史資料室
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学
玉川大学 中央大学 東海大学
日本工業大学 日本大学 明治大学
立教大学
議事 合同研究部会の開催について
- 第31回 1992年11月13日（金）13時～14時
会場 慶應義塾図書館小会議室（旧館2階）
出席校 神奈川大学 成蹊大学 玉川大学
中央大学 日本工業大学 日本大学
明治大学
議事 (1)1992年度研究部会の日程について
(2)会報『大学アーカイブズ』第8号の発行について
(3)アンケート調査について
(4)来年度の合同研究部会について
(5)来年度総会について
(6)その他（規約改正の件、西日本大学史担当者会との交流を深める件などを継続審議する）
- 第32回 1993年1月27日（水）14時～15時
会場 中央大学駿河台記念館580号室
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学
玉川大学 中央大学 東海大学
日本工業大学 日本大学 明治大学
立教大学
議事 (1)「大学史」編纂・資料保存等に關

するアンケート調査について

- (2)会報『大学アーカイブズ』第8号の編集について
(3)1993年度事業計画について
(4)1993年度合同研究部会の開催について

- (5)第24回研究部会について
(6)その他（愛知大学の協議会入会を1993年4月1日付で承認する）

- 第33回 1993年3月11日（木）13時30分～15時
会場 中央大学駿河台記念館510号室
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学
玉川大学 中央大学 東海大学
日本工業大学 日本大学 明治大学
立教大学

- 議事 (1)1993年度の活動について
(2)会報の発行について
(3)1993年度合同研究部会の開催について
(4)その他（関東学院の協議会入会及び伝農和子氏＜青山学院資料センター＞の協議会入会＜個人会員＞を1993年4月1日付で承認する）

研究部会記録（抄）

- 第21回 関東地区大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会
1992年9月30日（水）～10月2日（金）
会場 9月30日 同志社 社史資料室
大谷大学図書館

10月1日 オオサカサンパレス会議室
10月2日 国立民族学博物館
参加校 関東地区 20大学 1個人会員
西日本 17大学
計37大学 1個人会員 54名

見 学 9月30日 同志社大学内建造物（クラーク記念館・有終館・彰栄館・礼拝堂・理化学館）
大谷大学図書館（閲覧室・書庫など）
10月2日 国立民族学博物館（書庫・収蔵庫・標本資料室・くん蒸室・電子計算機室など）

講演会 10月1日 宇野文男氏（国立民族学博物館情報管理施設情報企画課）
「資料の整理と管理－国立民族学博物館での現状と課題－」
※講演内容につきましては本号に掲載した宇野氏の論稿をご参照ください。

報 告 10月1日 中野 実氏（立教大学図書館大学史資料室）
河野仁昭氏（同志社社史資料室）
(司会) 松崎 彰（中央大学大学史編纂課）
共通テーマ「大学史編纂と資料の収集・保存」
※報告・討論の内容につきましては、本号に掲載した「1992年度合同研究部会を終えて」をご参照ください。

第22回 1992年11月13日（金）14時～17時
会 場 慶應義塾図書館小会議室（旧館2階）
参加校 18大学 計34名
挨 拶 西川俊作 慶應義塾福澤研究センター所長
報 告 佐志 傳氏（福澤研究センター所員）
「マイクロフィルム版 福澤関係文書と大学史の編纂作業について」

見 学 三田演説館・図書館（旧館）内展示室
※本研究部会の内容につきましては、本号に掲載した「マイクロフィルム版 福澤関係文書について」をご参照ください。

第23回 1993年1月27日（水）15時～17時
会 場 中央大学駿河台記念館580号室
参加校 16大学 4個人会員、〈オブザーバー〉
愛知大学（田崎哲郎）計31名
講演会 佐藤秀夫氏（日本大学文理学部教授）
演題「戦後教育改革に関する資料と研究－国内資料と在米資料を中心に－」
※講演内容につきましては、本号に掲載した佐藤氏の論稿をご参照ください。

第24回 1993年3月11日（木）15時～17時
会 場 中央大学駿河台記念館510号室
参加校 16大学 1個人会員 〈オブザーバー〉
愛知大学（大野一石）計26名
報 告 日露野好章氏（東海大学50年史編纂室）
「『図録 東海大学50年』の編纂について」

概 要 ※はじめに日露野氏は、大学史編纂の抱える現実的な課題が関係資料の収集・保管に対する認識に端的に表れることを強調され、報告を始められた。
※報告においては、学校法人東海大学における大学史の取り組みを、刊行物・組織変遷・50年史の取り組みといった三つの側面から詳述し、その成果と問題点を指摘した。
※まず大学史関係の刊行物として、松前重義著『回顧と前進－東海大学建学の期－』他5点の刊行物を紹介し、記述内容の特色などを説明された。ついで組織の変遷に話を移し、東海大学の諸規定などを引用しながら概略を述べられた。そしてまとめとして50年史の取り組みについて触れられ、50年史編纂組織と編纂の基本的な姿勢、及び『図録 東海大学50年』の刊行にいたる経緯を説明された。そこで日露野氏が繰り返し強

調された問題点は、東海大学の資料収集が50年史編纂に必要なものに限定されているという点であった。

※最後は『図録 東海大学50年』編纂にかかる具体的な苦心を紹介して、報告を締めくられた。

※質疑応答は『図録 東海大学50年』編纂の苦心に集中し、著作権の問題や実質的なスタッフなどについて各大学間で意見交換が行われた。

ミニ情報

※『明治大学百年史』および『明治大学史紀要』の刊行、「明治大学の歴史展」開催の予定について

『明治大学百年史』は、これまで第1巻・第2巻と刊行してきました。これらは史料編です（前者は幕末～大正7年、後者は大正8年～昭和56年）。このたび第3巻が発刊されました。本書は幕末から大正7年までの通史編Ⅰです。購入申込み等のお問い合わせは明治大学歴史編纂事務室（電話 03-3296-4086）までお願いします。なお、続く第4巻（大正8年～現在）は通史編Ⅱとして1994年度に刊行する予定です。

『明治大学史紀要』の第10号も刊行しました。紙数の関係で上記の通史編には掲載しきれなかったことを公にしたり、あるいは同書刊行後、見い出された新史料を紹介することなどを目的に編集しました。

今回は「昇格期の明治大学」という特集です。配布御希望の方は上記事務室までお問い合わせください。

明治大学では歴史編纂事務室を主管として今年の10月に「明治大学の歴史展」（仮称）の開催を予定しております。展示に関するここと、あるいは関係の史料等についての御指導、御協力をいただければ幸いです。

（明治大学歴史編纂事務室）

<会報編集担当>

神奈川大学資料編纂室	〒221	横浜市神奈川区六角橋3-27-1	☎045-481-5661
東海大学資料室	〒151	渋谷区富ヶ谷2-28-4	☎03-3467-2211
立教大学図書館大学史資料室	〒171	豊島区西池袋3-34-1	☎03-3985-2693

※『中央大学百年史編集ニュース』第19号
1993年3月刊行

板橋学生寮における昭和20年～30年代の学生生活を特集。あわせて、1992年4月から11月までの収集史料を紹介。

『中央大学史紀要』第5号と『中央大学史資料集』第12集は、1993年度刊行予定。

（中央大学広報部大学史編纂課）

※『神奈川大学史資料集』第9集刊行

第7・8集に統いて国立公文書館所蔵文部省公文書から横浜専門学校の学則変更に関する許認可申請書などを収録。

（神奈川大学資料編纂室）

※『九州大学 大学史料叢書』創刊される

九州大学大学史料室では、本年3月『大学史料叢書』を創刊した。創刊号には「九州帝国大學沿革史料一」が収録されている。今後、さらに「沿革史料」の復刻を続ける。

また、同史料室では、大学内外にその活動を伝える『九州大学 大学史料室ニュース』を合わせて創刊した。

※『桃山学院年史紀要』第12号を刊行

桃山学院年史委員会は、3月『桃山学院年史紀要』第12号を刊行した。卒業生の回想や資料紹介、学院年報等を収録。

（以上2校の紹介は本会報編集担当者）

ご案内

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。会則、会報などをお送りいたします。

なお、1993年度の総会は、5月10日（月）午後2時から中央大学駿河台記念館320号室で開催いたします。

〈事務局〉

中央大学広報部大学史編纂課

〒192-03 東京都八王子市東中野742-1

☎ 0426-74-2132